

今回は中国の俗信を考えてみます。中国でも日本と同じように、死後はあの世に行くと考えられていました。彼らはこれを黄泉と言いました。黄泉は地下にあるようです。黄とう字は中国の黄土地帯を意味するのでしょうか。

死後黄泉に行くと、そこはこの世と同じようで、生前の生活と同じようにして過ごすしていました。そこからまた地上に生まれ変わるかどうかは明確な記録はないようです。

これとは別に死後の魂は山に行くという考えもありました。泰山や崑崙山が有名ですが、それぞれの地方にそういう山があったようです。仙人のような人は、その山から天に昇ったり、また地に戻ったりする事ができるとされていました。

中国では、人の死は北斗星が決め、生（誕生）は南斗星が決めるとされていました。

次の話は有名です。むかし魏の国に管という易者がいました。彼が田舎の道をたどっていますと、道ばたの畑で趙という青年が働いていました。管は趙をみて、「可哀想に」と呟いて行き過ぎました。趙は聞きとがめて管に追いつき、その訳を聞きたいと言いますが、管は答えようとしません。しかし趙が執拗にせがみますので、ついに「お前の寿命が短いからだよ。それでため息が出たのだ」と教えます。趙は驚いて「どうすれば助かりますか」と尋ねますが、「それは言えないよ」と答えず、立ち去ってしまいます。趙は自宅に戻り、父親に話しますと、父親もびっくりして、息子を連れて管を探し回り、見つけて助かる方法を教えて下さいと懇願します。管は困りましたが、ついに根負けしてこう教えます。「村はずれの大きな桑の下で、二人の老人が碁を打っている。お前はそこに鹿の干し肉と酒を持って行って、黙ってそれを二人の脇に置きなさい。声を出してはならない。二人はそれを飲んで食べるだろう。やがてお前に気付いてお前を叱るだろう。その時も声をださず、平身低頭していなさい」と。

趙青年は言われた通りにします。老人は碁に夢中で超に気付かず、肉を食べ、酒を飲みます。やがて碁が終わって趙に気付くと趙を叱りますが、趙は平身低頭するばかり……。北側の老人は怒りが収まりませんが、南側が折れて、「食べて飲んでしまったのだから……」と北を宥めます。そこで北側が懐から寿命簿を取り出して見ると、趙の寿命は十九歳とありました。北側の老人は仕方が無く、数字を逆さまにして寿命を九十歳としてくれました。

北側の老人は北斗星、南側が南斗星だったことは言うまでもありません。こうして趙は九十歳の長寿を楽しむことができました。

道教には道（タオ）という概念があります。タオは宇宙の根源のような意味だそうです。このタオから気が生じ、気が集まって生命となるといいます。道教の祖とされる荘子に次のよう話が伝えられています。

荘子の妻が死んだとき、荘子は少しも悲しみませんでした。この態度を人がなじりますと、彼は答えました。「もともと妻は無だったのだ。ただ気が集まって人になったに過ぎない。妻は気に還ったのだ。これは春夏秋冬と季節が巡るのと同じことだ」と。